（三）ふるさとの産物「三田の梅」

青梅は「梅」にゆかりの地とお伝えしましたが、市内には、歴史や伝説を秘めた銘木・古木が沢山あります。三田地区の「鎌倉豊後（※1）」、梅郷地区では「親木の梅」・「宝珠梅」・「岩割りの梅」などの他沢山の木々がありますが、早春の頃には多くの人々が訪れる「梅の公園」もあります。昔から

しかし、プラムポックスウイルスが猛威を振い感染した梅の木は全て伐採されるという壊滅的な打撃を受けてしまいましたが、復興に向けた関係者の努力が実り、平成二九年(2017)十一月二三日には、「梅の公園」で「梅の里再生植樹式」が執り行なわれました。この日、浜中青梅市長を始め地元の関係者や小学生も参加して梅の苗木が植えられ、復興へ向けた力強い第一歩が踏み出されました。（※二十四頁に写真「梅の里」復興への取り組み）

三田の梅について　（ふるさとの梅は、品質も値段も日本一）

かつて、三田地区でも「生梅」の生産が盛んに行なわれていて、優れた品質の生梅は東京築地市場品質も値段も日本一と一目置かれる、ふるさと自慢の「生梅」でした。その蔭には、生産者の地道な努力に加え、営農指導の立場から農協と農業改良普及所が一体となって取り組んだ成果かも知れません。

加えて、梅の品種として農林省登録第一号となった「玉英（ぎょくえい）」がありました。「玉英」生みの親、二俣尾二丁目の篤農家野本英一さんは、屋敷内にある梅の木が毎年良い実をつけることを知り、育苗から成木（せいぼく）、結実までの経過をつぶさに観察すると共に、「玉英」と命名、農協や農業改良普及所の協力を得て品種登録を行ない、昭和三五年十二月二五日、梅として初めて農林省種苗登録第一号に「玉英」が登録されました。以来、広く知られるようになり、苗木も市内はもとより全国に出荷されるようになりました。（この額を入れたい）

「玉英」という名の由来について、野本さんは「屋敷内にある親木の近くに祀（まつ）られている玉川稲荷の「玉」と、自分の名から一字を取り、名を付けた」と伺いましたが、残念なことに、この親木もプラムポックスウイルスに感染して伐採され、今はその姿を見ることは出来ません。

昭和六〇年頃の当地の梅の植栽面積は約十二ヘクタール、本数は約三、六〇〇本、昭和六二年の出荷量は、二一、八九〇kg、売上金額は約三五一万円で、二キロ箱に詰められた良質の「生梅」は、一箱四、五〇〇円という市場最高値がついたということです。

当時、農協は合併前で各農協がそれぞれ「生梅」を市場へ出荷していました。出荷に当っては、農協と生産農家が責任を持って選果、箱詰めして市場に出して競りにかけるという個別選果方式でした。生産者も丹精して育てた実を収穫したり箱詰めする

時には、傷をつけないように爪を切ったり、濡れた実には扇風機の風をそっと当て乾かしてから箱詰めするなど心配りをしたといいます。三田農協の営農指導部担当者の話に「二俣尾地区のある生産者の梅は、当日競りから外され、その日の競り値の高値に更に上乗せした値段がつけられたといいます」。まさにふるさとの「生梅」は、品質も値段も日本一といえるでしょう。

三田地区の梅のルーツに筏乗りが

三田地区で良い梅の実が採れる理由の一つに挙げられるのが、「筏乗り」にあると聞くと驚かれる方も多いと思いますが、当地の地場産業で発展の原動力となったのは林業で、特に大消費地である江戸から東京へと時代は変わっても、出荷する木材は「青梅材」として高い評価を受けていました。

特に、交通機関が未発達の頃は、輸送路として多摩川が果たした役割は大きく、その木材を運んだのが筏乗りでした。「筏乗夫名簿」（明治二〇年・三田領筏師会所編）には、三田地区で一五七名もの筏乗りが登録されていて、他の地域より圧倒的に多かった。

筏を流して多摩川を下り、終着地の六郷に近い川崎の小向村（川崎市幸区）には大きな梅林があり、明治天皇が行幸されるほど立派な梅園で現在は「御幸公園」となっています。

今でも、梅の実の効用は広く知られていますが、当時は梅干弁当で知られるように防腐、薬用効果が高く重用されていたので、筏乗りが帰りに、良い実のなる苗木を持ち帰ったことは当然と思われます。三田地区にも吉野地区にも「小向」と名のついた梅の木が沢山ありますがこのような由来によるものです。写真は二俣尾四丁目小山宅にあった青梅市指定樹九六号で「小向」の札が付いています。残念なことにプラムポックスウイルスに感染して伐採され今はありません。

この梅の木は、写真に写る前方の白い建物はＪＡ西東京二俣尾支店で、国道から奥多摩橋へ向かう道沿いにありました。

東京都農業試験場の芦川場長からも「『〇〇小向』と名のついた梅が、両地区にありますが品種名ではなく、「小向」から来たものでそう呼んでいる」と伺いました。

（私の祖父、積造の名もある）

品種「小向」青梅市指定 96 号

明治天皇行幸の碑

「小向」から来た梅が定着した証（あかし）といえるでしょう。
また、良質の梅を生み出すため栽培に携わった多くの人々の努力があったことも忘れてはなりません。新しい苗木も導入から、長い歳月をかけて淘汰され良い実を結ぶ「梅」だけがこの地に残り、その成果が「日本一の梅」を誕生させたといえるでしょう。

吉野の梅について

梅郷地区の梅についても古い歴史があります。「親木の梅」が礎（いしずえ）となったとも言われていますが、昔から「この辺は梅の木が多く、実を取り、毎年江戸へ馬で百駄以上出しては売っていた。また、花の頃は雪が白く積ったように見えて言葉では言い表すことが出来ないほど美しいといわれた。

上郷の大聖院には素性の良い一本の梅の木があって、里人はこの種子を分け合い、家毎に播き育てていたので「親木の梅」と名がつき、今日の隆昌の基となった：」と記されている。（「我が村の梅」より、読みやすく直しました）

この吉野地区からも、梅の農林省登録品種「梅郷」が誕生しています。

郷土ゆかりの文豪、吉川英治（文化勲章受章・青梅市名誉市民）は、戦火を逃れ梅郷の草思堂に移り住み「新・平家物語」を執筆されていますが、「梅」を好まれた方で、草思堂にも梅の木があり、「梅一路 御岳見えたり かくれたり」と梅の里での情景を詠まれた句もあります。私の好きな「白梅は紅梅に倚（よ）り 紅梅は白梅に添ひ 双照双映 いよいよ白く いよいよ紅し」このような歌も作られています。

神代橋近くにある「紅梅苑」は、吉川英治の奥様が創業されたお店ですが、店名は吉川英治の好まれた「紅梅」から名付けられたと言われています。

平成二一年春 記

（※1）梅の「鎌倉豊後」については、別項で紹介します。